

お客さま様
元気通信
むけ

おかげさまで
ありがとうございます

お客さま、お元気ですか？ 今年も台風が少ないと思いきや矢継ぎ早に発生し、あつという間に例年の発生数に追いついてしまいました。中にはUターンしてきたものもあり、これには驚かされました。いざという時の為に備えをしておかなければならないと思っただけであれこれ用意をしても、ちゃんと中身をチェックして入れ替えているか？ということもなかなかできていないのが現状なので、また気を引き締めないとならないと思うこの頃です。

さて、前回の号ではチャンスの神様の話をさせていただきました。今号は「おかげさま」「ありがとう」という言葉について考えてみたいと思います。

私たちは「おかげさまで」という言葉を使うことがありますが、どんな時に使っているでしょうか。具体的にお世話になった人への感謝の意を表す時や、円滑なコミュニケーションを図る際の枕詞として漠然とした使い方をすることもあってはいませんか？と思います。このように日本語は実に重宝で、同じ言葉を使ってもちゃんと使い分けできるので、英語だとそうはいかないようです。

この「おかげさま」お陰様という意味は、自分以外の人からの知恵や力を借りて益を得ること、古くは「陰」＝神仏など偉大なものの陰で庇護を受けること、とあります。つまり私たちは有難いことのお陰で生かされているわけで、本来このことに感謝の意を表す言葉が「おかげさま」なのですね。そして、「ありがとう＝有難う」は、有ることとが難しいのがあることを感謝する言葉というわけですね。

けれど、なんであれ「おかげさまで」「ありがとう」「この二つの言葉を口にする」と、心があつたかくなり、優しい気持ちになりますよね。

心からの感謝を込めて・・・

弊社は昭和五十二年九月に設立し、以来お客さまをはじめ皆様方のご愛顧をいただき、四十年目に入りました。創業何百年という歴史を持つお客様方の足元には到底及びませんが、これからも十年先、二十年先を見据え、設立者である私の父が掲げた社は「誠実・研鑽・克己・敬神・報恩・調和」を胸に、鋭意努力して参りたいと存じます。どうか、これからも宜しくお願い申し上げます。

日本の野鳥シリーズ

オジロビタキと少年

技術営業部 佐藤 弘

一時期バード・ウォッチングが流行り、市民探鳥会ともなると参加者で膨れあがった。これでは静かに「鳥を探す」どころか「鳥追い」になりかねない。案内役のベテラン・リーダー不足で駆り出された私は、鳥を驚かさないうに会話はなるべく控え移動はゆっくりと、我が班の参加者をお願いした。92年5月10日春の渡りはピークを少し過ぎた頃だった。場所は新潟市青山海岸保安林。私が参加する関屋海岸調査地から南西数キロの距離にある。

メジロ大で背面は灰色で喉が赤い鳥が出た。初めて見るからカゴ抜けの外国種か、などと言いながら図鑑を開くと恥ずかしや、オジロビタキ雄の成鳥と分かった。越冬地の東南アジアから繁殖地のシベリアへ渡る途中、日本見物に立ち寄ったようだ。この珍客を他の班にも引き合わせるべく、居合わせた森本君に見張りを頼み知らせに廻ったが、数分後に戻ると逃げ去ったあとだった。

当時青山小学校野鳥部六年生トリオの一人森本君は、顧問の先生や重鎮の方々の指導よろしきを得て研鑽を重ね、大学では鳥類学を究めた。ここ数年おきにその方面の会合で彼と顔を合わせる機会があり、いずれ懇親会の席で昔の小学生を少しだけ酔わせてみたいと、悪いオジサンは密かに企んでいた。14年秋鳥類標識調査に関わる全国規模の集会在新潟市であり、その機会がやって来た。

懇親会が始まり待ってましたと声をかけた「さあ、ゲンちゃん飲もうか」「すみません、まったくダメな体質で…」悪いオジサン何かを言わん。私が気安く呼ぶ、博士号を持つ若手鳥類学者森本元君は、山階鳥類研究所でデータ・ベース管理を担当している。目もと涼しい少年が「末は博士か…」を実践してみせた。

関屋海岸調査地の過去29年間の合計放鳥数は17万羽を超えたが、本種はわずかに雌が3羽記録されていた。それにつけても、パソコンのフィルター機能の有難いところだ。

サポート・新規事業PJ 山本知男

つい先日まではリオで燃え上がり、今度は東京オリンピック、と2020年に向け夢を膨らませていました。オリンピックと言えば私なんかは1964年の東京オリンピックが一番記憶に残っています。その年は新潟国体もあり、当時新潟市内の小学校に通っていた私は毎日毎日ワケの分からないマスゲームの練習やって、いつの間にか開会式のオープニングに出ていて、やっと終わったと思ったら新潟地震。しばらくはロウソク暮らし。給水車が来るとその度に長い行列に並んだりしていたら、そのまま夏休みになり秋になり、授業は仮のプレハブ小屋で受けていて、そのプレハブ小屋にテレビが入り、オリンピックだからと言う事で、授業中にテレビ見ながら応援していた。当時小学3年生の私には、まさに激動の1年、あまりにもいろんな事があって、強烈に覚えています。私は陸上と体操が好きで、よく見ていました。1964年の時は体操男子が金メダルを取って大活躍。遠藤幸雄さんと山下跳びとか恰好良かった。女子はチャップラフスカさんが圧倒的でした。今とは全然違って優雅な演技で綺麗な子ども心に思ったものでした。今はもう男子並みにクルクル回るようになって、そんな流れに変えたのはコマネチさんでしょうか…。と、昔を回想しながら見ていました。こんな話は若い人には分らないか(^^;)。

今年も感動の多かったオリンピック、2020年にはどんな感動が生まれるか楽しみなところですが、オリンピックのメイン会場の設計やり直しからケチが付いて、費用も膨大に膨れ上がっている、エンブレムもやり直し、そして豊洲市場の地下空洞問題。東京では続々と問題が出てきて、果たして間に合うのかなと心配されています。どこかで私利私欲の獣たちがウゴメイテいる、まさに伏魔殿。そんな日本にいつの間になってしまったのか。

何はともあれ2020年に向けて選手たちはもう準備している。最高のパフォーマンスを出そうとして4年間も研鑽を重ね、感動をもたらす努力を始めているのだから、間に合わないとか手抜きとか無いようにして欲しいものです。そして皆がまとまって、また素晴らしい感動を共有出来たら良いなと思います。

◆ちょっと豆知識◆ その29 「ラーメンブームに思う」

技術営業部 部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

今更ながら、ラーメンブームである。

塩麴や食べるラー油はすっかりなりを潜めたのに、なぜかラーメンブームは衰えを知らない。

新潟のローカル月刊情報誌などは、2月に一回ラーメン特集をやっているが、商業誌として成立しているところを見ると、飽きられて部数を落とし「存亡の危機」という状況でもないのだろう。

少し度が過ぎた表現であるかも知れないが、「ラーメンは麻薬である」が持論である。特に、永らくブームをけん引していた、いわゆる「家系」の、うまみ成分たっぷりのラーメンは、特に味覚形成途上の小学生くらいまでには食べさせてはいけない、と思っている。

卑近ながら成田家の事例を挙げさせていただく。

これまでの仕事柄、また夫婦共稼ぎの核家族ということもあって、成田家のエンゲル係数は比較的高いと思われる(他所の家と比較したことはないけれど)。娘たちが小学生の頃、新潟市内の人気店に連れて行った時のことである。

いわゆる「ダシダシした」ラーメンで、うまみ成分が「これでもかっ!」という濃度で襲い掛かるラーメンであった。確かに「旨い」。ただし「美味しい」とか問われると、個人的には度が過ぎていて品性を欠いているように思われた。

が、娘二人は髪を振り乱しながら丼にかぶりついている。スープまで飲み干してしまった。家に帰ってからもことあるごとに「お父さん、またあのラーメンが食べたい」と言い寄ってくる。

その姿を見て、先の「ラーメンは麻薬である」という想いに至った。正確に言うなら「旨み成分は麻薬である」か。

旨み成分に限らず、塩味、甘味等は、高濃度に長期間さらされると、味覚の閾値が上がるのが予想される。実際、前職で醸造協会の「実践きき酒セミナー」をパクって社内のきき酒研修を行ったことがあったが、普段から味の濃いものを食している方は、総じて味覚の閾値は高く、また弁別閾は大きかった(n=10程度の集団での結果なので一般論まで拡張するのは無理があるかと思うが)。

味覚が形成された大人ならまだしも、せめて中学生までは、強烈な味わいの食事は、少なくとも高頻度で食べさせないのが大人の努めであろう、と思う。

私の酒造りの師匠からは、ニンニク、生のネギや玉ねぎ、ニラ等もきき酒に影響を及ぼすからブロの醸造技術者にはご法度、と教わった。

今、普通の食生活を送れることをとても幸せに思う。

★魅せられた★

エッセイ

生産部 島貫 修一

日本の名曲アルバム放送150回記念コンサートを、BSでご覧になった方もおられると思います。若手声楽家で結成されたアンサンブル

(少人数の合唱団)が歌うのは、昭和の歌謡曲と平成のJポップ。声楽科で学び鍛え上げられたメンバーの美声・歌唱力・表現力は、日頃テレビ・ラジオで歌っている歌手が、アマチュアと思える程の差を感じさせてくれた。

TOHO Amici(トーホーアミーチ・女声)が歌った「M」と「遠い世界に」は、ハーモニーが絶妙で美しいという言葉でしか表現できない。透明感のあるソプラノ、柔らかく響くメゾソプラノ、そしてやさしく包みこむようなアルトのハーモニーはまさしく声の芸術。

「踊り明かそう」を歌ったChor stella(コールステッラ)は混声だが、ソプラノとアルトが醸し出す洗練された華やかさは圧巻。男声も負けてはいない。杜の音シンガーズ(混声)が歌った「勝手にしやがれ」の2番にはテノールとバスの重唱があり、男声の力強く歯切れのよい歌声も心地よい。混声は低音域が広がることで重厚感が増してくる。

天が二物を与えた女性メンバーのロングドレス姿も花を添えている。生地・色彩・デザインにアクセサリー・ヘアスタイルも含めて、彼女たちの強いこだわりが見て取れる。

ビデオに録画していたので、エッセイのテーマにしようと繰り返し見ていたら、いつのまにか頭の中に歌声が次々と流れてくるようになった。「夢で逢えたら」だったり、「365日の紙飛行機」だったり、「夢一夜」だったり。アンサンブルに魅せられてしまった。